描画コミュニケーション実習に関する予備調査：実験のデザインに向けて
A preliminary survey of the drawing communication exercise: Toward designing an experiment

田中彰吾
Shogo Tanaka

東海大学
Tokai University
shogot@tokai-u.jp

Abstract
First, this article reports the results of a preliminary survey, which was conducted in order to design a communication experiment based on nonverbal and impromptu drawing. 55 pairs (110 participants), who exercised the drawing communication in the author's classes, answered a questionnaire. 27 pairs (49%) were positive about the communication through drawing, while 6 pairs (11%) were negative. Second, comparing the comments and remarks by participants of both positive and negative cases, we found three steps involved in the actual process of drawing communication: (a) Making use of the nonverbal signals, (b) Understanding the partner's intentions of drawing, (c) Imagining the partner's ideas on drawing. Finally we discuss that among these three steps the first one is the most important and necessary for effective communication, and that it is able to understand from Merleau-Pontian notion of Intercorporeality.

Keywords — drawing communication, nonverbal behavior, phenomenology, Intercorporeality

1. はじめに

描画コミュニケーションは、筆者が担当する講義において、非言語的コミュニケーションの実習の一環として学生たちに行わせている課題のひとつである。以下で見る通り、この課題は、私たちが日々実践しているコミュニケーション（とくに非言語的な側面）について、さまざまな角度から考察するヒントを多く含んでいる。筆者は、この課題を用いたコミュニケーション実験をデザインするため、授業の機会を利用して、予備調査を実施した。本稿では、その結果と、そこから得られた考察、今後の実験の見通しについて報告する。

2. 描画コミュニケーションの概要

(2-1) 趣旨と手順

描画コミュニケーションは、2 人 1 組で白紙の上に交互に描画を行いながら、1 枚の絵を制作する実習である。実施に際しては、事前に次の点を参加者に伝えている。

- この実習は、言葉を使用することなく、パートナーとコミュニケーションを図る練習として行うものである。描画には、1 箱のクレヨン（20 色）と、A4 サイズの白紙 1 枚を共同で使用する。
- 開始から終了まで、会話は一切行ってはならない。紙面に文字を書いてもいけない。ただし、非言語的なコミュニケーションの実習として行うものなので、言葉以外の手段（たとえばジェスチャー、表情、アイ・コンタクトなど）は、自由に用いてよい。
- この実習は、絵のうまさを競うものではないし、終了後に絵の内容を問題にするものでもない。目の前のパートナーと、できる限りコミュニケーションを取ろうとしてみる、という趣旨のものである。上手に描けるかどうかを気にする必要はない。
- 描画の内容や形式に制限は設けないので、文字や数字以外なら何を描いてもよい。人、物、風景などの具体的な対象を描いても構わないし、色、形、模様などで抽象的に表現しても構わない。

(2-2) 作品

当然予想されることであるが、できあがる作品はきわめて多様で、描画の内容に共通性を見出すのは難しい。ランダムに選んだ 4 枚のサンプルを図 1～4 として掲載する。

描画の主題には、各種の風景（たとえば図 3)、人物（たとえば図 4)、動物や植物、食べ物、マンガ・アニメーション・ゲームなどのキャラクターとそのシーン（たとえば図 1）などが見られる。また、はっきりとした主題を持たず、色・形・模様・線などの組合せで構成されており、具象画より抽象画に近いものも一定の頻度で見られる（たとえば図 2)。ただ、いずれの場合も、あたかも 1 人で描いたかのような、統合的な印象を与える作品が多いことは興味深い。以下のサンプルも、そのように見えるのではないだろうか。

図 1

図 2

図 3

図 4

(2-3) 感想

作業終了後に描画過程を振り返るさい、参加者から次のような感想がしばしば聞かれる。

- 「言葉なしでもコミュニケーションを取ることができて、驚いた・面白かった」
- 「普段の会話に比べて、相手の考えや気持ちについて、よく考えた」
- 「お互いに描きたいことのイメージが共有できると、描画がスムーズに進んだ」
- 「表情・視線・身ぶり手ぶりなどから、相手の意図を読み取ろうとした」

こうした感想に接すると、さまざまな問いが浮かんでくる。そもそも、「コミュニケーションを取ることができた」とはどのような事態を指しているのだろうか。言葉を使わなくてもコミュニケーションが成立するとすれば、そこで伝達されたり、共有されたりしている内容は何なのだろうか。描きたいことのイメージを共有するうえで、相手の心的状態を推測する「心の理論」はどのように用いられているのだろうか。表情・視線・身ぶり手ぶりなどの非言語行動に見られる身体性は、コミュニケーションの成立にとってどのような役割を果たしているのだろうか。

これらはいずれも、描画コミュニケーションという特殊な状況に端を発する問いでありながら、私たちが日常的に実践するコミュニケーション行為そのものの本質につらなる問いであろう。こうした問いについて考察を深めるうえで、描画コミュニケーションは貴重な素材であると考えられるのである。

3. 予備調査

(3-1) 調査方法

それまでの実習の参加者からもっとも多く聞かれていた感想（「言葉を使わなくてもコミュニケーションを取ることができて、驚いた・面白かった」）に着目して、描画コミュニケーションの体験を参加者自身に評価させることにした。

調査方法には質問紙を用いた。描画の終了後、参加者に描画のプロセスを振り返らせ、コミュニ

ケーションの成立度を以下の 5 段階で評価させた。

(5) 非常によくコミュニケーションを取ることができた

(4) 十分にコミュニケーションを取ることができた

(3) ある程度コミュニケーションを取ることができた

(2) 少ししかコミュニケーションを取ることができなかった

(1) ほとんどコミュニケーションを取ることができなかった

記入は、互いのパートナーと離れた位置で個別に行わせ、互いの評価について相談させないようにし、結果の開示も行わなかった。

また、希望者には、質問紙の余白部分を用いて自由記述による感想を求めた。

(3-2) 調査対象者

2010 年度秋学期から 2011 年度秋学期にかけて、大学生 110 名（男性 86 名，女性 24 名，年齢データなし）を対象に実施した。全員が同じクラスで筆者の講義を受講していた学生であるが、それまで一度も話したことがない相手であることを条件に、2 人 1 組のペアを設定した。男女数のばらつきが大きいため、性別に関して条件は設けなかった。終了後、45 名から自由記述による感想を得ることができた。

(3-3) 調査結果

コミュニケーションの成立度を示す数値については、ペアごとに、次の 2 つの観点から整理することが可能である。(A) 5 段階評価の合計点 : 互いの評価値の和で、最少 2 点から最大 10 点まで分布する。(B) 5 段階評価の点数差 : 互いの評価値の差で、最少 0 点から最大 4 点まで分布する。全 55 例の得点の分布は、次段の表の通りである。

表　コミュニケーション成立度に関する主観的評価の分布（行は合計点，列は点数差）

	0 点差	1 点差	2 点差	3 点差	4 点差	計
10 点	(5-5) 12 件	——	——	——	——	12 件
9 点	——	(4-5) 13 件	——	——	——	13 件
8 点	(4-4) 2 件	——	(3-5) 5 件	——	——	7 件
7 点	——	(3-4) 6 件	——	(2-5) 0 件	——	6 件
6 点	(3-3) 11 件	——	(2-4) 3 件	——	(1-5) 0 件	14 件
5 点	——	(2-3) 3 件	——	(1-4) 0 件	——	3 件
4 点	(2-2) 0 件	——	(1-3) 0 件	——	——	0 件
3 点	——	(1-2) 0 件	——	——	——	0 件
2 点	(1-1) 0 件	——	——	——	——	0 件
計	25 件	22 件	8 件	0 件	0 件	55 件

4. 考察：評価値の分布について

(4-1) 評価値の合計点

合計点は 6 点の事例が最も多く（14 件, 25%）、次いで 9 点（13 件，24%）、10 点（12 件，22%）の順に多い結果となった。ただし、点数の組合せでみると「4 点－5 点」（13 件）、「5 点－5 点」（12 件）、「3 点－3 点」（11 件）の順に多い。全体として表を見ると、着目すべき特徴は次の 2 点にあると思われる。

第一に、合計点はすべての事例で 5 点以上であり、4 点以下になる場合は見られなかった。とくに、参加者がともに「コミュニケーションを取ることができなかった」（2 点以下）と否定的に評価している場合はなかった。

第二に、参加者がともに 4 点以上の評価を与えている事例が 27 件（49%）を占める。つまり、約半数の参加者は、「非常によく」または「十分に」コミュニケーションを取ることができた、と肯定的に評価していた。

いずれの結果も、描画コミュニケーションその

もののポジティヴな可能性を示唆している。描画という視覚的なチャンネルと、その他の非言語的なチャンネルのみを介して、相手とコミュニケーションを取ることは十分に可能なのである。言語を介してメッセージを伝達するという一般的な形式でなくても、「コミュニケーション」と呼びうる現象は十分に成立すると言える。これは、日常的な実感からも十分に予想がつくことであろう。

(4-2) 評価値の点数差

0 点差が最も多く（25 件，45%）、次いで 1 点差（22 件，40%）、2 点差（8 件，15%）の順で多かった。3 点差、4 点差の事例はまったく見られず、全事例において、評価の差は 2 点以内に収まった。

0 点差もしくは 1 点差の範囲で見ると、じつに全体の 85%（47 件）が該当する。つまり、大半の事例においては、僅差で互いの評価が一致していたことになる。逆に、参加者間で、肯定的評価（5 点～3 点）と否定的評価（2 点～1 点）にコミュニケーション成立度の評価が分かれた事例は、「2 点－4 点」（3 件）と「2 点－3 点」（3 件）の場合で、合計 6 件（11%）にとどまった。

したがって、次のように言ってよいであろう。大半の事例においては、コミュニケーションの成立度について、相手の評価を知らされていなくても参加者間で近似する認識が成立する。成立度についての判断は、おそらく、各自の主観的な印象のみで決まるのではなく、一定の範囲で間主観的に成立しているのである（もちろん、そのメカニズムはさしあたりよく分からないのだが）。

5. 考察：自由記述について

(5-1) 考察の観点

評価値の分布から分かるように、描画のプロセスにおいては、「コミュニケーション」と呼んでよい事態が成立しており、コミュニケーションの成立度についての評価も互いに近似する場合が多い。それでは、より具体的に、描画コミュニケーションは当事者の間でどのように経験されているのだろうか。そこでいう「コミュニケーション」の内実はどのようなものだろうか。

この点について考察するため、「5 点－5 点」「4 点－5 点」「4 点－4 点」と参加者がともに高い評価を与えた 27 事例（全体の 49%）を「成功事例」とし、逆に、「2 点－3 点」「2 点－4 点」と参加者間で成立度の評価が肯定と否定に分かれた 6 事例（11%）を「失敗事例」とみなして、自由記述の内容を比較する作業を行った。明確な違いが見られたのは以下の 3 点であった。

(5-2) 非言語的なやり取りに関する指摘

描画コミュニケーションでは、表情、ジェスチャー、アイ・コンタクトなど、非言語的で身体的なコミュニケーションは自由に用いてよいことになっている。各種の非言語的なやり取りについて、成功事例では以下のような指摘が見られた。なお、カギ括弧内はすべて参加者自身による記述であるが、体裁を整えるうえで必要最小限の修正を加えてある。

- 「お互いに時おり顔を見合わせて、どんな風に描いたらいいか分からず困った顔をしたり、相手が何を描くのかワクワクしながら待っていることが表情から分かり、クレヨン画を楽しめた」
- 「少しだけ描いて『ゴメンね』と両手を合わせるジェスチャーをすると、向こうが笑顔で『OK！』と指でサインをくれて、だんだんとコミュニケーションが取れ、いい空気でやることができました」
- 「自分が相手に期待することがなるべくわかり易いように、身ぶり手ぶりや相づちを大きくすることで、自分の考えを伝えることを試みた」
- 「描いている途中に目を合わせて笑いあったり、顔をしかめて『分からない』なんていう表情をしたり、手の動作で『WHY?』とやってみたり、表情や身ぶり手ぶりでここまでお互いの気持ちを楽しませることができるのだな、と気づいた」
- 「クレヨン画は描くもののテーマが決まっておらず、選択の幅が広すぎてまったく予測

がつかない。そこで私は、相手の描こうとするものを予測するために相手の表情を読もうとした。自分が描くときも、クレヨンを 1 本ずつ手にとって相手の表情の変化を見てみた。笑ったときは『これで当たってるんだな』と感じ、迷った表情のときは『違うんだな』と感じ取ることができた」

- 「途中、何度か二人で微笑みあったり、うなずいたりなどのコミュニケーションをとりました。…（略）…〔自分の意図を〕目でうったえたり、身ぶり手ぶりなどで伝えたりしました」

他方、失敗事例には以下の指摘が見られた。

- 「男二人で黙って絵を描き合うのが異様なことに感じられ、非常に恥ずかしかったです」
- 「ジェスチャーで伝えることも少しはできたけれど、やはり納得がいくほどの『あー、そういうことか』という感じにはならなかった」

以上の記述を見ると、成功事例では、表情やジェスチャーそれ自体において、互いの感情（「ワクワク」「分からない」「楽しい」など）を共有できていることが分かる。また、それにとどまらず、互いの意図を伝達する手段として身体的なシグナルが利用されている。自分の意図を相手につたえるために身体表現を大げさにする、相手の意図を読み取ろうとして相手の身体表現に注意深くなる、という事態が相互に生じているように見える。

(5-3) 互いの意図に関する指摘

上の点に関連するが、身体的なシグナルを用いて非言語的に伝達される互いの「意図」とは、どういった種類の意図なのだろうか。成功事例では、この点に関して以下の記述が見られた。

- 「僕とペアになった相手は、自分の意図しているものをとてもよく理解してくれた」
- 「やってみると案外、相手が何を描いて欲しいのかや、何のことを描いているのかが分かりました…（略）…後で何をイメージして描いたのか聞いてみるとほぼ一緒の考えで驚きました」
- 「私はお花を意識して描いていて、相手の方もそれに答えるようにお花につづくものを描いてくれました。やっている最中も『そこ塗って欲しい』とか『そこ付け足して！』と私が思うと、相手の方はそうしてくれたり、意思が伝わって嬉しかったです」
- 「何を描いていいのか分からない状況でも、お互いに何かしら描いているうちに、じょじょにこの人はこういうことを描きたいんだ、と感じることができた」
- 「自分が描きたいと思っている絵、相手が描きたいと思っている絵、苦労するところもありましたが、何とか伝え合うことができました」
- 「しっかりと読み取ってもらいたかったのでていねいに絵を描きました。すると相手も分かってくれたみたいで、すらすらとお互いの思ったことを絵にして伝え合うことができました」
- 「相手はなぜその絵を描いたんだろう。相手はどういう考えや意図があるんだろうということを頭の片すみに置いておけば、その絵に一連の共通点が生まれる」

成功事例では、相手が何を描こうとしているか、という描画の意図が互いに理解できているように見える。ここには二つの水準がある。ひとつは、相手が描いている内容や対象が何であるかを理解すること。いまひとつは、互いに絵を描き合うことで、一筆ごとに描画全体が変化していくが（たとえば空の花瓶に花を添えるなど）、その先の作品の展開についてイメージを共有できるということ。それゆえ、たとえば「相手が何を描いて欲しいのか」が分かるといったことにもなるのであろう。つまり、作品全体のテーマを共有できるかどうかという水準での互いの意図の理解ということである。これに対して、失敗事例に見られたのは以下の指摘である。

- 「ほぼ初対面の相手で、相手の描いた絵が何を表しているのかが分からず、相手の意図を

理解できなかった」

- 「相手がどんなことを考えているかを懸命に考えた。しかし私が考え、次につなごうと思ったものを、また私の意表をつき、描き返されてしまう」
- 「相手が描いているものが何なのか予測し、それに対して返答の意を込めたものを話さずに描くというのは非常に困難だった」

以上を見る限り、相手の描いているものが理解できない場合もあるし、理解できても、自分の描こうとしているものとかみ合わない場合もある。ただしいずれも、実際の描画を通じて互いの意図を調整することはできていない。参加者の一方が以上のように感じていることが、コミュニケーションの成立度を否定的に評価した主な要因になっていると思われる。

(5-4) 相手の心的過程に関する指摘

互いに描こうとしているものの意図を理解し、作品の展開についてイメージを共有してゆくさいには、相手の考えを読み取ろうとしたり、相手の想像していることを思い描いたりする作業がともなう。いわゆる「心の理論」を用いるプロセスである。成功事例には次のような指摘が見られた。

- 「自分の思っていることだけを描いてしまうと、何を描いているのか分からなくなってしまい、完成することがない。なので、私は『この人は何を考えているのだろうか』と考えて、それに合わせて描くことにした」
- 「スタートしてすぐは相手が何を描きたいのか理解できずに、互いにかなり長時間考えてから絵を描き上げていった。後半は、会話がなくても相手の考えていることが少しずつ理解できた」
- 「最初はぎくしゃくしていたが、後々相手の思考が読み取れるようになり、すらすらと絵を描くことができた」
- 「相手は最初、雨を描いた。僕は、この絵を見て、『今日は雨が降っているから、雨を描いたのだろう』と考えた。次に、雨が降っているとすると、何を想像するだろうと考えた。すると、『傘じゃないか』という考えが浮かんだ」
- 「絵を描くことで、その人の心の中が分かるような気がしました。雨、嵐、火事のような風景なら少し心が荒れているんだなと思いますし、夕日、朝日、昼間の風景だとおだやかな気持ちなんだなと思います。同じことが、使う色でも分かる気がしました」

失敗事例では、対照的に、同様の作業がきわめて困難だったとの指摘が見られた。

- 「相手が何を描こうとしているのか言葉として伝わらないので、その場で自分なりに感じ取ることが求められた。そして、自分が考えていることと相手が考えていることはとても違うということに気づかされた」
- 「ほとんど初対面の状態で、相手の考えていることを理解するのは無理だった。人はやはり、ある程度一緒にいて、コミュニケーションを取りあうからこそ、相手の考えていることも分かるようになるのではないだろうか」
- 「相手の絵を見て、相手の考えを読み取ろうとして、かえって分からなくなってしまいました。こうなると、自分の手も止まってしまいます」

具体的で目に見える描画内容から、目に見えない相手の心的過程について考え、想像し、理解すること。成功事例では、この点について肯定的な印象が得られており、相手の心的過程を理解できたことで、それが再度具体的な描画内容へと反映され、互いの描画がかみ合い、良い方向で描画のサイクルが進展してゆくようである。

(5-5) 自由記述に関する考察のまとめ

以上の分析から、描画コミュニケーションで生じている「コミュニケーション」の内実には、次のような緩やかな階層性を見て取ることができる。すなわち、(1)非言語的なシグナルをやり取りすること→(2)描画内容から互いの意図を読み取ること→(3)直接には知覚できない相手の思考や想像を推測すること、という三段階の階層性である。表情やジェスチャーなど、もっとも具体的で身体

的な相互作用に下支えされながら、互いの意図の理解や、相手の心的過程の推測といった、抽象的で心的なコミュニケーション過程が成立しているように思われる。

6. 予備調査から得られた見通し

(6-1) 非言語的なやり取りの重要性

予備調査の結果を受けて、筆者が得た仮説的な見通しは次の点にある。それは、表情やジェスチャーのやり取りに見られるような、参加者間の身体的な相互作用のあり方が、コミュニケーション成立度の主観的評価に大きな影響を与えているのではないか、ということである。

先述したとおり、成功事例と失敗事例の自由記述を比較してみると、(A)非言語的なやり取り、(B)意図の読み取り、(C)心的過程の推測、という 3 点に大きな違いがある。ただし、緩やかな階層性が見て取れると指摘したとおり、(A)の非言語的なやり取りが最初に求められる必要条件であって、この点がクリアできないと、それ以上はコミュニケーションが進展しにくくなるように思われる。

たとえば、一方が描画を終えて用紙を手渡す場面では、相手がうなずいたり微笑んだりすることがしばしばある。その動作は「あなたが何を描いたか理解できていますよ」という趣旨のメッセージになっているように見える（もちろん、それ以外の趣旨である可能性もある）。逆に、顔をしかめたり首を横に振ったりする動作は「あなたが何を描きたいのか分かりません」というメッセージとして伝わるだろう（または、それ以外のネガティヴな含意も持つだろう）。こうした非言語のやり取りがないと、描画内容が伝わっているかどうか、互いに判断することが難しくなる。

また、非言語的なやり取りのなかには、必ずしも本人に意識されないレベルで生じている微細なものも多く見られる。たとえば、一方が描き始めると他方が身を乗り出して紙面を見る、一方が頭を抱えると他方が腕を組む、一方がクレヨンを見つめると他方も同じように見つめる、等々である。これらのやり取りは、2 人 1 組での描画という作業が、そもそもコミュニケーション行為として成立するための時間的・空間的な「場」を形成するのに役立っているだろう。これは、当事者自身に必ずしも意識されないために自由記述から読み取りにくい論点だが、予備調査の過程で学生たちを観察するなかで、先の(A)に含めてよいと筆者が感じた点である。

いずれにしても、描画コミュニケーションにおいては、紙面に描かれた色と形のみから描画内容を相互に伝達できるとは限らないため、こうした非言語のやり取りが成立していることがきわめて重要である。そうでないと、紙面を見て描画の内容を読み取ること（先の(B)）が困難となり、目に見えない相手の心的過程を推測すること（先の(C)）はさらに難しくなる。成功事例では、非言語的コミュニケーションとして実践される身体的な相互作用が、一方的なものではなく、しっかりと噛み合った相互作用として成立していると推測されるのである。

(6-2) 間身体性と「行動の同調」

以上の見通しに対して有効な補助線を与えてくれる概念がある。現象学的身体論の哲学者M・メルロ＝ポンティ（1960）が提起した「間身体性 intercorporéité」である。

間身体性とは、自己の身体と他者の身体のあいだに広がる独特の相互的関係性である。たとえば、自分があくびをしたのにつられて友人があくびをしたり、友人が満面の笑みを浮かべているのを見て思わず自分も頬が緩むのを感じたりするような現象がある。これらの例では、他者の行動を知覚することが、自己の身体において同じ行動（またはその可能性）を喚起し、逆に、自己の行動が、他者の身体において同じ行動（またはその可能性）を喚起している。間身体性とは、このように、自他の身体間において知覚と行動（および行動の可能性）が循環的に連鎖する相互的関係性のことを言う（図 5 参照）。

メルロ＝ポンティはもともと哲学上の他我問題を論じる文脈において、つまり、他者の意識や心はそもそも理解できるものなのか、という原理的

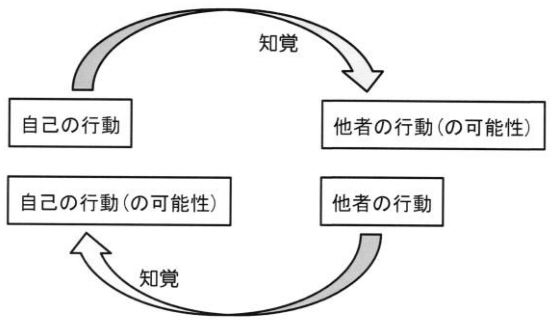

図５　間身体性の概念

問題との関連において間身体性の概念を提起している。他者理解が成立する間主観性の基盤に、身体性の次元があることを示唆しているのである。

他方、これと同時に、経験的な次元における具体的な現象としては、乳幼児の他人知覚や共鳴的模倣を出発点として、コミュニケーションや他者理解の問題を論じている。とくに、講義録『幼児の対人関係』（Merlau-Ponty, 1951/1997）を参照にすると、間身体性が、哲学上の他我問題から心理学的で経験的な次元の他者理解の問題までを一貫して扱おうとする概念であることが理解できる。

ところで、メルロ＝ポンティの時代には知られていなかったものの、現在のコミュニケーション研究では、間身体性を裏づける事例は数多く知られている。たとえば、新生児が大人の表情を模倣する（Meltzoff and Moore, 1977）、乳児が母親の発話に合わせて声を出そうとする（Cappella, 1981）、心理療法の面談場面でセラピストとクライエントの姿勢が一致したり、グループで会話中に複数の人が自然と同じ姿勢を取ったりする（Scheflen, 1964）、授業中に教師の姿勢が変化すると、それに合わせて一定数の生徒の姿勢が同様に変化する（LaFrance and Broadbent, 1976）、特定の感情が他者へと伝わるさいに表情の自然な模倣が生じる（Hartfield, Cacioppo, and Rapson, 1993）、等である。

いずれも、ある身体の知覚を介して、他の身体においてそれに類似する非言語行動が生じるという現象である。これらの現象は、mimicry、mirroring、congruence など、文脈によってさまざまな呼称で呼ばれていて必ずしも定着した術語がないが（長岡, 2006）、ベルニエリとローゼンタール（1991）は、「行動の同調 behavior matching」という術語でこれらを包括的に理解することを試みている。コミュニケーション当事者の行動が、いわば鏡写しになったように類似する現象を指す。間身体性の概念を、部分的に反映する術語であると言ってよい。

描画コミュニケーションにおいても、参加者ペアの間身体性を示唆する行動の同調は多く見られる。たとえば次のような場合である。

- 一方が笑う→他方がそれにつられて笑顔になる
- 一方が紙面に向かって前傾した姿勢を取る→他方もほぼ同時に前傾する
- 一方が顔を上げて相手の顔を見る→他方も顔を上げて目が合う

これらは、観察者の視点からすると、意識的にそうしているというより、むしろ「ただなんとなく」「ごく自然に」「相手につられて」生じていると思われる。

(5-3) 間身体性と「相互作用の同期」

間身体性の概念にもとづいてコミュニケーションをとらえることが重要であるのは、間身体性に見られるような、自他のあいだの知覚－行動の循環的関係が、私たちの一般的な他者理解の基盤を形成しているからである。自己の身体と他者の身体のあいだには、いわば鏡映的な関係が潜在的に広がっている。そして、他者の行動を知覚すると、自己の身体において同じ行動が仮想的に再現され、他者の行動の意図が直感的に了解される（本稿の趣旨からはそれるが、この点は、ミラーニューロン・システムに関する神経科学の議論でも指摘されていることである。リゾラッティとシニガリアの議論（2009）を参照）。

ごく身近な例で言えば、本棚の高い場所に他人が手を伸ばしているのを見て、「本を取ろうとしている」というその人の意図が分かる、といったことである。つまり、言語的なメッセージを理解することや、目に見えない相手の心の状態を想像す

ること以前に、身体レベルでの自他の関係が、他者理解をもっとも基礎的な次元で支えているのである（Gallagher, 2005; Gallagher and Zahavi, 2008; 河野, 2005）。

描画コミュニケーションの文脈に即して言うと、間身体性を反映する、もっとも基礎的な次元での他者理解は、たとえば次のような場面で目に見えて現われてくる。

- 一方がクレヨンに手を伸ばす→他方がクレヨンを見る
- 一方が描画を始める→他方が身を乗り出して用紙を見る
- 一方が描画を途中で止める→他方が相手の顔や目を見る
- 一方がクレヨンを置く→他方がうなずく

これらはもちろん、相手が何を描こうとしているかとか、描くことで何を自分に伝えようとしているかといった、伝達されるメッセージ内容の理解を示すものではない。それ以前のレベルで、いわばコミュニケーションの入口部分において、相手が何を描こうとしているかが決まった、相手がこれから描き始めるところである、相手の描画が思い通りに進んでいない（または描画の方向性を変えたがっている）、これで描き終わった等、相手の行動の意図を理解していることの現われになっているのである。

そしてこれらの場面では、一方が行動を起こすと、継起的なタイミングで他方も行動を起こしている。観察者の視点からしても、身体的な行動のやり取りにおいて、一方の行動の意図が他方へと伝わっていることが読み取れる。すなわち、互いの行動が時間的にかみ合い、同期しつつ進行していくことが、行動上の意図の理解を示す指標となっているのである。このように、コミュニケーションにおける複数の動作が同期し、協調することを指して、先のベルニエリとローゼンタール（1991）は「行動の同調」とは別に「相互作用の同期 interactional synchrony」として概念化している（なお、同期 synchrony は、コンドンとオグストン（1971）による会話研究において提示された概念で、発話者－聴取者の身体性が同期するとの指摘に由来する）。

7. 今後の研究に向けて

予備調査の結果を踏まえて、まず改めて確認しておきたいのは、描画コミュニケーションの持つ、「コミュニケーション」としてのポジティヴな可能性である。質問紙調査の結果を見る限り、クレヨン画を介した非言語の状況であっても、「コミュニケーション」と呼びうる事態は十分に成立しうる。また、相手とコミュニケーションが取れたかどうかという判断も、僅差で一致する場合が全体の８割以上を占めており、ある種の間主観性の成立を示唆していた。

描画コミュニケーションでは、あえて言葉を用いないという制約を課すことで、言葉を用いていれば容易に伝わるであろう記号的なメッセージの伝達可能性が大幅に抑制される。だがそれゆえに、非言語的なコミュニケーションの諸チャンネルを活性化し、その機能をきわだたせる。成功事例では、視線・表情・ジェスチャーなど、身体的なシグナルのやり取りそれ自体において、当事者間でさまざまな感情が共有されるし、描画の意図を伝達する手段としても巧みに利用されている。この点をクリアできるからこそ、描画を通じて互いの意図を調整したり、相手が次に何を描こうとしているかを推測したりする抽象的で高度な作業が可能になっているものと思われる。

今後の研究で筆者が明らかにしたいのは、コミュニケーション成立度の主観的評価が相互に高い値を示す成功事例と、当事者間での非言語的なやり取りの成立度との相関関係である。おそらく、成功事例では、メルロ＝ポンティが間身体性と名づけた身体間の相互的関係性が、当事者間では十分に成立しているだろう。しかもそれは、たんに潜在的で不可視な次元にとどまるのではなく、「行動の同調」や「相互作用の同期」という顕在的で観察可能な次元にも現われてくるだろう。したがって、成功事例では失敗事例に比べて、当事者の身体性に「同調」と「同期」の関係がより多く、

また、より安定した頻度で観察されるであろう。これが、今後の研究で検討すべき仮説である。

以上の考察にもとづき、今後の研究では、次のようなステップで実験と分析を進めてゆく予定である。(1)実験参加者を募集し、描画コミュニケーションの過程をビデオカメラで記録する。(2)予備調査と同様の方法で、コミュニケーションの成立度を主観的に評価させ、成功事例、失敗事例、その他の事例に区別する。(3)間身体性を客観的に評価するための「同調」と「同期」の動作カテゴリーを設定する。(4)記録した映像のうち、成功事例と失敗事例について、「同調」と「同期」の出現パターンを定量的に評価し、比較する。

以上、ひとまず今後の方向性を明確化したことをもって、今回の予備調査を終了することにしたい。

引用文献

Bernieri, F. J., and Rosenthal, R. (1991). Interpersonal coordination: Behavior matching and interactional synchrony. In S. Feldman and B. Rimé (Eds.), Fundamentals of Nonverbal Behavior (pp.401-432). Cambridge: Cambridge University Press.

Cappella, J. N. (1981). Mutual influence in expressive behavior: Adult-adult and infant-adult dyadic interaction. Psychological Bulletin, 89, 101-132.

Condon, W. S., and Ogston, W. D. (1971). Speech and body motion synchrony of the speaker-hearer. In D. Horton and J. Jenkins (Eds.), Perception of Language (pp.150-184). Columbus: Merrill.

Gallagher, S. (2005). How the Body Shapes the Mind. Oxford: Oxford University Press.

Gallagher, S., and Zahavi, D. (2008). The Phenomenological Mind: An Introduction to Philosophy of Mind and Cognitive Science. New York: Routledge.

Hatfield, E., Cacioppo, J. T., and Rapson, R. L. (1993). Emotional Contagion. Current Directions in Psychological Science, 2, 96-99.

河野哲也. (2005).『環境に拡がる心ー生態学的哲学の展望』勁草書房.

LaFrance, M., and Broadbend, M. (1976). Group rapport: Posture sharing as a nonverbal indicator. Group and Organization Studies, 1, 328-333.

Merleau-Ponty, M. (1951/1997). Les relations avec autrui chez l'enfant. Parcours 1935-1951 (pp.147-229). Lagrasse: Verdier.

Merleau-Ponty, M. (1960). Le philosophe et son ombre. Signes (pp.259-295). Paris: Gallimard.

Meltzoff, A. N., and Moore, M. K. (1977). Imitation of facial and manual gestures by human neonates. Science, 198, 75-78.

長岡千賀. (2006). 対人コミュニケーションにおける非言語行動の 2 者相互影響に関する研究.『対人社会心理学研究』6, 101-112.

リゾラッティ, G., シニガリア, C. (2009).『ミラーニューロン』(柴田裕之訳) 紀伊国屋書店.

Scheflen, A. E. (1964). The significance of posture in communication systems. Psychiatry, 27, 316-331.

※ 本研究は、次の各補助金の助成を受けた。2012 年度科学研究費補助金（課題番号 24500709），2012 年度東海大学総合研究機構「研究奨励補助計画」，2012 年度東海大学学部等研究教育補助金。